

先日、アメリカの友人から手紙が届いた。「ヨシ、来年は再挑戦して日本へクルーズ船で行くよ。そのときは東京で会おう。君の家族も連れてきてくれ。楽しみにしているよ」というメッセージに、来日の概略日程表が付いていた。先月、家族の写真を添えて送った手紙の返事である。

昨年5月、本欄に「日本に来てくれるか」と題して投稿が掲載された。結局を言うと、コロナ禍で彼のクルーズは中止になってしまい、会えなかった。

彼との関係を簡単に述べると、私が30代半ばのときに仕事の関係で1カ月ほどお世話になった家庭のお父さんである。初めて体験する異国での家庭生活は、あまりにも日本と違い、新鮮であった。そして、その後の自分の仕事に大いに役立った。

それ以来、毎年クリスマスカードのやりとりが続いた。その後、リタイアした彼は世界各地を旅して「いつかはヨシのいる日本へ行ってみたい」と言っていたが、月日だけが流れた。そして、90歳を過ぎてからの再会となりそうである。きっと来年になれば新型コロナウイルス騒動は終息していくのではないかと期待している。会えるのは10月になるだろう。それまでに、さびつき始めた英語力のアップを図る努力をしようと思おう。

来日の夢はかなうか

点差

こうさてん

後期高齢者になっても、お世話になった人に会える喜びはひとしおである。今度こそ夢がかなえられて、さらに友情が深まればいいと思う。孫たちにも彼と話せる英語力をつけるように連絡した。

(安曇野市穂高、荻原義重、77歳)